令和四年度吾月の読書会

「なおちゃんの弱みと強み」

むかしむかし、ではなく、ごく最近のお話です。あるところに貧しい一家が住んでいました。

お父さんとお母さんとお姉さん二人となおちゃんの五人家族でした。

なおちゃんは、とても内気な男の子でした。

一家のトイレは貧しいおうちで水洗トイレではありませんでした。

一番上のお姉さんはピアノを弾くことが好きでしたが一家は貧しく家には電子ピアノさえありませんでした。

なので一番上のお姉さんは紙に鍵盤を書いていつも練習していました。

ある時、ピアノ教室の体験で電子ピアノを弾こうとお姉さんがした時に、電源の入れ方をわからずオドオドしていた姿をお母さんとなおちゃんは心配しながら見守っていました。

なおちゃんにとってお姉さんは、いつもしっかり者だったのでその姿を見てとても切なくなりました。

そんな場面を見て意を決したお母さんは、お姉さんのためにピアノを突然買ってあげました。

貧乏な家だったので、何も知らないお父さんが怒りだしますが、お母さんとなおちゃんは動じずにやり過ごしました。

お姉ちゃんのすすめでサッカーをやっていると女の子にもてることを聞き、なおちゃんは不純な動機でサッカーを始めました。

ただボールが買えないぐらい貧乏でした。

ボロボロの手作りのようなボールで一生懸命練習しました。まわりの子たちは早くからサッカーを始めていたので全然追いつくことができませんでした。

それでもどこでスイッチが入ったのか、猛練習を行い、サッカーの名門高校に入り大勢の部員の中で一年生からレギュラーの座を射止め、三年生では副キャプテンとしてインターハイにも出場しました。

しかしサッカーで、そこまで上達したのに、なおちゃんには別の夢がありました。

子どもの頃、意図しない場面でクラスの中で笑いをとった経験が忘れられない体験となり、人を笑顔にする仕事につきたいという夢を持つようになりました。

けれども見た目、明るくなく、どちらかというと暗く目立つタイプでなかったなおちゃんは、孤独感も強く夢は相当遠くに感じられました。

また家族は大好きでしたが、子どもの頃、お父さんの親戚の集まりでお父さんが道化のような踊りをしていて笑いをとっていた場面がありました。

まわりの親戚から促されて、なおちゃんも踊れと促され踊ってみると、お父さんを上回る笑いをとることができました。

その後で、お父さんから「調子に乗ってんじゃねえぞ」と言われたことが大人の闇を感じた経験となりました。

なおちゃんは中学生になって国語の教科書に掲載されていた小説家の短編小説に出会い衝撃を受けました。その後はその小説家の作品を読破し、他の小説家の作品も次々と読破していきました。

自分自身と同じような暗い感覚をもっている人たちがそのような感覚を文学作品で表現していることを発見し、小説の世界にどっぷりとつかっていきました。

高校生になると女の子に告白され交際することになりますが、サッカー漬けの生活をしていたのでデートらしいデートもできないままに過ごしていました。

なおちゃんは、身長が百六十五センチだったので、彼女からは、あと十センチ身長が高かったらよかったのに、と言われることがありました。

ある日、彼女に振られてしまいました。

そのすぐあとに、身長百七十五センチの新しい彼氏と歩いているところを見かけてもショックを受けました。

お父さんの「調子に乗ってんじゃねえぞ」という一言や、身長が十センチ足りなくて彼氏を交換された経験も重なって、なおちゃんはより内向的になっていきました。

サッカーと小説（読書）に明け暮れ、高校を卒業すると上京し、お笑い芸人の養成所に入りました。

とても貧しかったこともありますが、上京して敢えてなおちゃんが選んだアパートは、とても古く共同トイレ、共同風呂で家賃が二万五千円でした。

トイレ掃除を率先してやると家賃の値引きをしてもらえるので、トイレ掃除も行いました。

貧乏な上に内気で社交性がなく、顔色も悪かったので、なおちゃんはコンビニのアルバイトの面接すらも落ち続けました。

ですので日雇いのアルバイトをすることも多くありました。

髪型も長髪で顔色も悪く目も充血していたので、若い頃からしょっちゅう警察官の職務質問を受けることが度々ありました。

あまりに職務質問を多く受けるので不思議に思い、警察官にどうしてか尋ねると「薬をやっている人の人相だから」という答えでした。

お笑いのコンビを組んだ相手は、中学時代の同級生でした。

コンビ名が「線香花火」という名前でまわりから縁起が悪いからよした方がよいと言われましたが、周りの意見を聞きませんでした。最終的に相方が結婚することになり解散してしまいました。

なおちゃんは売れない芸人だったので、とても貧しすぎて大好きな小説は値段が安い昔の明治、大正、昭和の時代の小説を古本屋めぐりをしながら購入し読んでいました。

自分自身に似た社会に馴染めない人たちの小説をたくさん読みこみました。

芸人養成所で文章を書く特集があり、読

書好きで知られていたなおちゃんが担当することになりました。

そんな中で文章を書く機会が増えてきました。

貧乏でお金のないので近代文学の純文学しか読むことができず、気が付いていると三千冊の小説を読んでいました。

若い頃、小説を書いてみようと挑戦しますが、挫折しました。

ただ一度小説を書いてみようとしたので、その後の読書は、読み手としてではなく書き手の立場から小説を読むようになりました。

そしてある時、小説を書いてみるように周りからすすめられ小説を書いてみました。

その小説が、なんと芥川賞を受賞してしまいました。

二千十五年の芥川受賞者は、なおちゃんこと、又吉直樹さんです。

又吉さんは中学生の頃、国語の教科書に掲載されていた芥川龍之介の『トロッコ』という小説を読んで衝撃を受けました。

そして太宰治の『人間失格』を読んで更に衝撃を受けました。

気が付いてみると、芥川龍之介と太宰治の小説をすべて読んでいました。

そして後でわかったことですが、又吉さんが最初に住んだアパートは、太宰治が住んでいたまさにその場所に建てられたアパートであったことを知り大変驚きました。

なぜなら、又吉さんが最も好きな小説家が太宰治だったからです。

又吉さんが太宰治の作品から感じ取ったのは、何もないことの強さです。

自分自身がまるで人間失格としか思えないほど、ダメダメな人間でも、その最悪なダメダメを立ち位置にしてしっかりと立つことを半ば開き直りのようにして生きていくことを教わったからです。

自分の存在価値を権威やお金や財産や地位や職業や能力によって上から目線で高飛車に人の優位に立たないと自分を保てないような弱さではなく、

また、自分の弱さを他人との比較の中で劣等感をもったり人をねたんだり羨むような卑屈に生きるような弱さでもなく、

自分の弱さや情けなさ、孤独感や孤立感をしっかりと見つめ受容し、その上に自分の足で立つこと、

そういうことを小説の中で感じ取ることができたのでした。

まさに弱みが強みになり、強みが弱みになりうる危うさやはかなさの上に、半ば開き直るように図太く生きることを小説や文学からつかみ取ったのでした。

その結果、芸人にして初めて芥川賞を受賞し世間をあっといわせました。

芥川賞受賞作の『火花』もよいですが、尊敬する太宰治の『東京八景』をヒントにした『東京百景』というエッセイもなかなか味わい深い作品です。

又吉さんは、貧乏な家に育ち、大人の闇や彼女との不条理な別れを通し内気になりましたが、たとえ自分自身に何もなくとも（弱み）そのことを受け入れて凛として立つこ

とができたら、それはそれで最強の強さ(強み)を手に入れたことになることを、太宰治や芥川龍之介を含め、多くのダメダメな人を描いた小説からつかみ取ったのだと感じます。

（おしまい）